



K O H O A I R A 広報あいら

第209号

表紙写真は、広報係がこれまで取材、撮影したみなさんです。

町の人口動態

(前年同月との比較)

昭和57. 8. 31現在 昭和58. 8. 31現在

33,960人……人口……34,624人

16,113人……男性……16,387人

17,847人……女性……18,237人

11,143世帯……世帯数……11,698世帯



町会合同行記

特集



ジョギングブームに代表されるように、巷(ちまた)では、健康づくりの気運が盛り上がりつつあるが、それを反映してか、町の歩こう会(小倉種夫会長)にも多くの町民の皆さんが参加し、自然に親しみながらの健康づくりに励んでいる。

広報係では、八月の歩こう会に参加、同会を体験的に味わってみたい。

帖佐駅を出発

八月十九日、金曜日。いよいよ歩こう会の当日だ。きょうの目的地は財部町の『桐原の滝』。十二時ほどの道のりを歩く。

小倉会長との前日の約束どおり朝七時五十分、国鉄帖佐駅へと赴いた。

八月とはいえ、暦の上ではもう秋。朝の日ざしには、夏の盛りあの肌を刺すような勢いは感じられない。

この時間、駅界わいはすっかり喧噪(けんそう)のなか。人々があわただしく行き交う。

駅の待合室には、運動着姿の人がやけに目立つ。きょうの参加者の皆さんだろう。思い思いに世間

話に興じている。

小倉会長はすぐ見つかつた。瘦身(そうしん)で、穏やかな感じの老人だ。満七十一歳とのことだが、年齢よりいくぶん若く見える。

型どおりのあいさつを落させて共に改札口を通り抜けた。「きょうの集合ぐあいはいかがですか」と質問すると「お盆明けのせいかもしれないが、それでも二十人ほどの、参加者らしき人々の姿がホームに確認できる。

それほど待つこともなく、宮崎行き普通列車が滑り込んできた。ディーゼルカーだ。この列車には重富方面からの参加者が、既に乗り込んでいるはず。だが初参加の当方には、どんな人が何人くらい乗っているのか、知る術(すべ)がない。

車内は比較的すいていた。六、七割の乗車率だろうか。苦もなく着席できた。乗客は圧倒的に高校生が多い。夏休みの補習に行くのだらう。

松原地区の家々の屋根が朝日に映えて美しい。しばし見とれてい

ると「ピー」という汽笛の合図とともに列車は静かに動き始めた。我々がめざすのは、霧島町の北永野田駅。時刻どおり七時五十八分の発車だった。

行軍を開始

車窓から吹き込む風が素肌に心地よい。列車に乗るのは何カ月ぶりだろう。たまにはいいものだ。「ゴトン、ゴトン」という、あの独特の音と震動がたまらない。ものの十分と経たないうちにも

う加治木駅。鹿児島行きホームでは驚くほど多くの人が電車を待っている。加治木町の「活力」を見せつけられる思いだ。

高校生

は、ここではほとんど降りてしまった。車内が急にガラランとなる、と同時にラジオの音が聞こえてきた。参加者のだれかが携帯した



足どりも軽くスタート

らしい。夏の高校野球の状況中継をしている。臨時解説者も何人か出現して喧嘩(けんけん)がくがく。だが、その声も列車が再び動き始めると、周りの轟音(ごうおん)にかき消されてしまった。

うおん)にかき消されてしまった。単人、国分と列車は進む。霧島町役場のしようしゃな建物を過ぎるとき、職員の間が動いている様子が見えた。「自分も勤務中の身。しっかり取材せねば」と改めて心に誓う。

霧島神宮駅、北永野田駅はトンネルが多く、これといった風景は見受けられない。真骨頂は紅葉の季節だろう。紅(くれなゐ)に染まった山々を想像するだけで楽しい。

八時五十九分、北永野田駅着。無人駅らしい。降りたホームから階段を上りつめると改札口があった。表に出る。駅の正面は竹やぶ、

左手には小さな集落。静かなところだ。周囲をぐるりと山に取り囲まれていて、この地自体、相当高所だ。山々の頂がすぐ近くに見える。

駅前でもーティングが行われた。ここで初めて参加者の全ぼうを把握。人数をあたってみる。四十七人だ。全体の八割くらいはご老人と見受けられるが、なかには、お母さんに付き添われたチビッコも四、五人いる。

かわいい服に小さなリュック。威勢がいい。

「老若男女、力を合わせて、仲よく健康づくりに励みましょう」との小倉会長のあいさつを聞く。全員が軽くうなずいた。

時計の針は九時六分。いよいよ出発だ。タイムを競う性質のものではないのに、なぜか少しばかり胸がドキドキ。足の弱い人を隊列の前面に、行軍を開始した。

麦茶がうまい

県道2号線を東へ向かって進む。道はなだらかな上がり坂。『永水地区』と書いたプレートが立っている。

五百ほど上がると、道は鋭角的に右へ折れた。幅員も急に狭くなる。進行方向に向かって、左手には道路ぎりぎりまで山が迫り、右手は切り立ったがけだ。このあたりまで来ると視界が開け、北永野田駅界わいが一望できる。だが線路は「緑」に沈んでしまい、どの方向に伸びているのかよくわからない。

二歳ほど行くと財部町に入った。疲労感ほ、まだ全然ないが、新調した麦わら帽子が頭をチクチク刺して痛い。日ざしの強弱にあわせて、かぶったりとったりした。もはや隊列はくずれしてしまっている。当初、最前部から最後部まで二十分ほどであったのが、もう百ほど近くに広がってしまった。道路の左右にできるわずかばかりの

木陰を求めて、まるで巨大な蛇のように曲がりくねりながら進んでゆく。

九時三十三分、一回目の小休止。道路から直角に伸びるあぜ道に入り込んで腰を降ろす。たばこに火をつけてみるが、のどが渇いているせいかおいしくない。

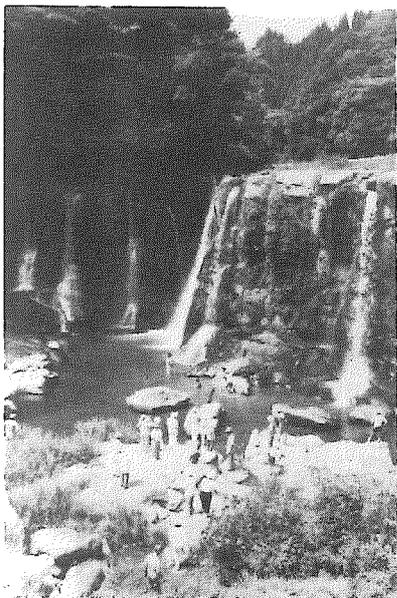
休んでいる人の様子から各々の体力の消耗がよくわかる。腰を降ろし、無言のままうつむいている人、野草をさがすために付近を歩きまわる人、屈託なく笑い声をあげている人、などなど。チビッコたちは、お母さんに冷たい飲み物を与えられ、満足そうに飲んでいる。

五分後、再び歩き始めた。トゥモロコシ畑がしばらく続く。

「吉ヶ谷」を過ぎたところで、一人の青年に話しかけた。青いジヨギングパンツに白いTシャツといういで立ち。高齢者の多いなか若い男性は目立つ。

その男性は、松元茂さん園といった。神奈川県で中学校で数学の教師をしており帰省中とのことだったが、両親（哲次さん・貞子さん）の強い要望で、親子三人参加。「湘南海岸に生徒を連れてよく出掛けますが、これだけの距離の山歩きは初めて。いい運動になりませぬ」と話してくれた。

セミしぐれのなか、歩きながらの会話は実に楽しい。話が途切れると周りの景色に目を移し、新しい話題が出たところで、また話し始める。時の経つのも忘れそう。



曾於八景の一つ『桐原の滝』に感激

「休憩」という声が耳に入り、二人の会話は中断した。十時十七分、二回目の小休止。木陰あり、小川のせせらぎあり——休むにはもってこいの場所だ。小倉会長に水を一杯所望する。すぐ様、冷えた麦茶の入ったコップを差し出してくださった。グツと一息に飲みほす。うまい。ほてった体がキュンと締まったような感じを受けた。

疲労がピーク

十時四十五分、大川原駐在所前の四文字を左折。大川原の集落に入る。駅前にはスーパリーや食堂があるが、人影はあまり見られない。先ほどから臀部（でんぶ）の筋が張って痛い。足を引きずりかげんになる。「運動不足」の四文字が頭のなかでチカチカする。

他のメンバーはまだまだ元気だ。そのほとんどが、明治・大正生まれの人。今のように交通機関の発達していない時代に育った人たちで、いわば、筋金入りの足をもっている。年齢と歩行可能な距離が決して比例しないことを教えてくれる。

九歳近く歩いたところで遊歩道に入る。けもの道のようなところを五十歩も進むと川にぶつかった。川幅は五歩ほどしかないが、上流部にあたるため流れは速い。

川の向こうの林の中に、赤い屋根の大きな建物が見えかくれする。財部町立高齢者コミュニティセンターだ。昼食は、同センターでとる予定ではあるのだが、とりあえずその先一棧の桐原の滝まで行き引き返さなければならぬ。

川沿いの遊歩道は湿っていて歩きづらい。すっかり弾力性を失った足腰にとっては大きな負担だ。汗を吸って重くなった衣服が、なおさら重く感じられた。

真昼の「ダイヤモンド」

十一時五分、高齢者コミュニティセンターを出発。同センター前から再び遊歩道に入る。

この一帯は「大川原峽」と呼ばれる風光明媚（ふうこうめいび）なところ。知名度はあまりないがその分、世俗化、していない。ちり箱や案内標板がいいたるところに設置してあり親切だ。

ユーモラスな「陰陽石」を過ぎ五十歩ほど下ると、ソーメン流しがあつた。まだ、昼前のせいにか二組ほどの客がいるだけ。

ここから道は再び溪流沿いに伸びる。道路面と水面との高さにはほとんど差がないので、上流から水がおおいかさつてくるような臨場感がある。

激流の一隅に、意外にも水の流が緩やかな浅瀬があり、子供たちが水遊びをしていた。手を浸すとひんやりして気持ちいい。

十分ほど桐原の滝に到着した。曾於八景の一つに数えられているだけのことはあり、すばらしい景観だ。十二歩の高さからゴーゴーと水が流れ落ちる様は圧巻——。滝をバックに、あちこちで記念写真の撮影が始まった。大きな岩に腰掛けてポーズをとっている人もいる。

正午近くの日ざしは強い。肌の露出部分は、日焼けで赤味を帯びてきた。体温も急上昇。体全体が膨張してしまったような感じを受ける。「滝のような汗」と表現すれば、本物の滝を前に今いち迫力に欠けるが、汗が体中を伝わるのがよくわかる。

十分ほど見学したのち、コミュニティセンターへ引き返すことにした。

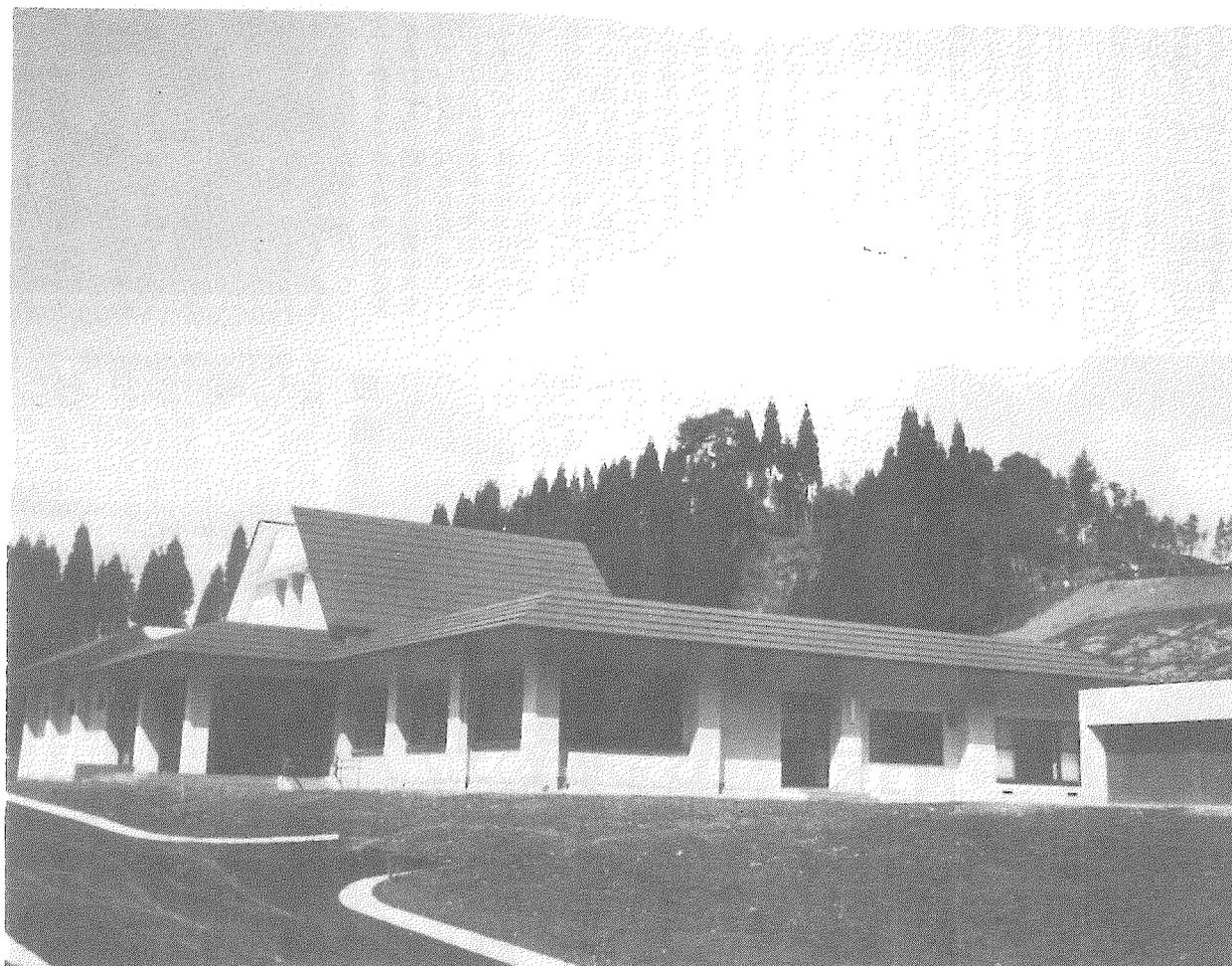
十一時三十分同センター着。三十畳ほどの大広間に入る。採光に気を配った明るい部屋だ。クーラーがよく効いている。ほとんどの人がふるるに直行した。

一ふる浴びたところで昼食の開始。男性は、しょうちゅう持参の人が多い。弁当のおかずを酒の肴（さかな）にチビリチビリ。真昼の「ダイヤモンド」といったところ。別に、もの欲しそうな顔をしていたわけでもあるまいが「おまんさあもいっぺ（一杯）飲んみゃんせ」とすすめられた。「仕事中ですか」と一度は断わったものの、あまり熱心に誘っていたのだに乗りかた、結局おちよこで三杯ごちそうになってしまった。

皆さんアルコールが入ったせいにか、全体的に声高。だが、乱れはない。熟した大人たちの会話だ。話の仲間に入れてもらい「疲れませんでしたか」と何人かの人に聞いてみたが、異口同音に「ノー」の返事。挙げ句の果てには「初めてやいやしたで、だれやしたろ（初めてだったから疲れただしよ）」と、当方が慰められる始末。

あつという間に二時間近くが経過して同センターを去ることになった。最後に全員が集まって、同会の次回の行き先を討議。結論はでなかったが、いくつか候補地があったので、そのなかの一つに落ち着きそう。二時四十七分発の列車に乗るため、大隅大川原駅へ向けて再び歩き始めたのが、二時二十分だった。

【「歩こう会」についての問い合わせ先】小倉種夫 電話二五一五



県民の森の一翼をなす森林学習展示館

県民の森

学習の場
生産の場
諸施設の有効利用を



『県民の森』は、区域を学習・生産・訓練・レクリエーション・保健休養の五つの「場」に分け、多種多様な施設を整備する。とりわけ「学習の場」と「生産の場」は深い絡みをもつ。「学習の場」には、森林学習展示館や緑化センターのほか野外実習展示園などを配置、「生産の場」には、キノコやタケノコや山菜の各「森」を設け、展示販売なども行う。これらは、小・中・高校の児童・生徒をはじめとする青少年を主な対象とし、みどり資源の尊さ、自然の美しさ・厳しさ、森林の働きや木材の有効利用等を理解してもらおう—というものだ。つまり、自然観察や林業生産活動の体験的学習を正しく把握させる施設であり、このような体験・学習を通じて、未来社会における、人間生活と森林の好ましい結びつき方を学んでもらう。

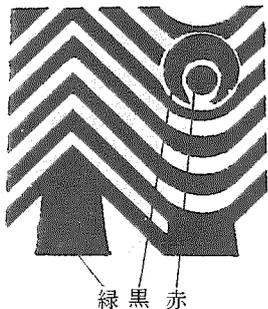
森林学習展示館は、それら諸施設の中核をなすものだ。同館は、赤い屋根と白い外壁のモダンな建物で総面積七七八平方メートル。館内を展示室と学習室に大きく二分、展示室には、写真や模型を展示し、

見る者に「林業」全般についての具体性をもたせ、学習室での研究・討論へとつなぐ。

森林資源の確保と有効利用がさげばれている昨今—同館をはじめとする『県民の森』諸施設が完成後に果たす役割は大きい。

シンボルマーク

直線で針葉樹と生産を、曲線で広葉樹と環境を表し、この二つの線と県章を組み合わせ、緑の資源豊かな県土を二十一世紀につないでいく姿を表現している



大会テーマ

二十一世紀へつなごう輝くみどり

大会標語

まず一本植えて未来へ豊かな緑

珍しいことや明るい話題がありましたら文書広報係（内線205）までご一報ください。

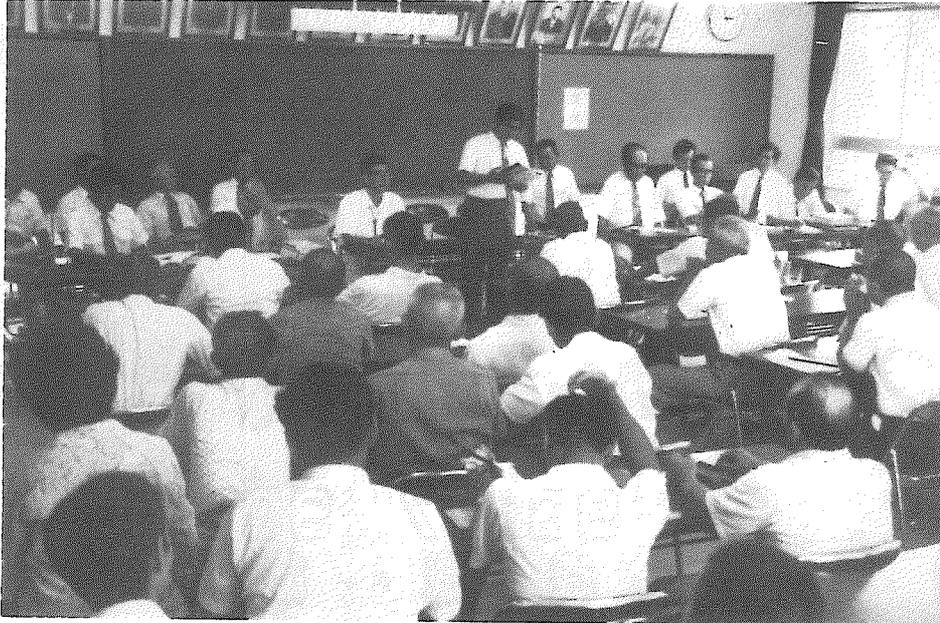
トピックス

「市制」と「高校誘致」に質問が集中

「ぬくもりある町政」をスローガンにした西野町政の、いわば“目玉、”とも言うべき「対話集会」が8月下旬から9月上旬にかけて、町内7つの会場で開催された。会では、まず、あいらつに立った西野町長が町の現状を説明。さらに、「役場の全課長・全事務局長を列席させていますので、どしどしご意見をお聞かせください」と述べた後、対話に入った。

7会場ともそれぞれの地域の実情に即した意見・要望が続出したが、各会場共通の話題は、「高校誘致」と「市制移行」の2点。両点とも密接な絡みがあるため論議的となり、するどい質問が相次いだ。

「市制」について、西野町長は「合併しての市昇格こそ現実的な話であり、私の夢」とし、「高校誘致」については「開発公社を有効に利用することで土地の確保を図りたい」と述べた。



会場によっては、予定の2時間を大きくオーバーするほど対話に熱気を帯びたところもあり、西野町長就任以来初めての「対話集会」は、好評のうちに終了した。

なお、同町長は、「今後とも、少なくとも年1回の割合で開催したい」と語っている。

各会場とも50人前後の皆さんが集まり、するどい質問が相次いだ。

ただいま編集集中

市制への「夢」とは？

「市制」を施行するためには、いくつかの要素を具備していなければならぬ。地方自治法第八條と、それに基づく「都市としての要件に関する（県）条例」の諸規定が、それら「要素」に当たるわけだが、当然のことながら、なかなか厳しい。人口・都市形態・類似都市との比較など細かい規定がビッシリ。資料を読み進むにつれ、財政力・発言力が「町」とは格段に違う「市」を誕生させるための「生みの苦しみ」を改めて知らされた次第。

ますます加熱する「市制施行問題」だが、予想とおり対話集会でもこの点に質問が集中した。「市制は可能か」との問いに対し、西野町長は「近隣の町との合併を図れば今すぐでも可能。合併こそ市昇格への大きなカギ」としながらも「それは私の夢」と締めくくった。

ところが、この「夢」ということばに「納得がいかない」といったむきも多かったようだ。「これほど（市制移行についての）世論が盛り上がりつつあるのに、いまだに『夢』とは何ごとか」といった意見も相次いだ。

だが、筆者は、五カ所の対話集会を取材し、再三にわたる「夢論議」を耳にすることで、同町長の言う「夢」の意味を次のように解

釈した。「私（西野町長）は、合併による市昇格を得策と考える。（合併の）大きな相手である加治木町長も同意見。だが、単独での市昇格を望む声もある。判断を下すのは町民の皆さん。それを仰がずして、町行政の方向づけはあり得ない。もし、合併による市昇格を図る声が大きければ、（市昇格への）具体性が強いことなので、近い将来、粗上（そじょう）にのせる覚悟はある。したがって、決して、机上の空論」というわけではない。あくまでも町民の皆さんの判断を仰ぐ材料として、私の「夢」とした」といったところか。

「夢」には「現れては消えるもの」といったとらえられ方をされる性質がある反面「思い描く将来の設計」という定義もある。町民一人ひとりが、長期的展望に立って、西野町長の言う「夢」を真剣に考えなければならぬ時期がやってきたのかもしれない。

単独か合併か——で白熱した論議を戦わせることは、町にとっても明る材料でこそあれ、決してマインナスになることではない。「市昇格」をねらえる数少ない町の一つに住む我々としては、積極的に意見や知恵を提唱し、それを反映させることで、お互い共通の郷土「始良町」をより発展させようではないか。

町最高齢者宅を

町長らが訪問

九月十四日、町長・始良福祉事務所長らが、町の最高齢者・小川内六左衛門さん宅(木津志)を敬老訪問。「もっともっとと長生きしてください」と激励し、長年の労をねぎらった。

小川内さんは、明治十五年七月二十一日生まれの満百一歳。四男の益男さん(御夫婦との三人住まい)だ。元来が働き者のうえに、極めて健康なため、よほどの力仕事でない限り雑用はすべてOK。「私がふるを沸かし『じいちゃんどうぞ』というのが筋なんでしょう。反対にすすめられる始末」と益男さんが話すように、やや病弱の「四男坊」に対する父親としての愛情もひとしおだ。

趣味は、テレビでの相撲観戦。若嶋津のファンで、得意技や癖を熟知、家族への説明役を買ってやることも。

敬老訪問の当日も、威風堂々と接客に努めた。県・町からの記念



「黒砂糖が大好き」と話す小川内さん



森元シカノさんも
近々100歳の誕生日

敬老金が手渡されると、はつきりした口調で「ありがたうございます。色々とお世話になります」とお礼のあいさつ。近況を問う来客の矢継ぎ早の質問にも、一つ一つ丁寧に要を得た答えを返していた。

なお、今年八月一日現在、町内の六十五歳以上の方の総数は四千五百八十九人で、総人口に占める割合は一三・二九%。前年同時期の同比率一三・〇九%に比べ若干高くなっている。

九月二十四日が誕生日の森元シカノさん(三拾町)。同日をもって満百歳となり、年齢三けたの「超長寿者」の仲間入りをする。これを祝い、九月十四日、国・県・町・町社協などから、祝い状・記念品・敬老金などが贈呈された。

森元さんは、満百一歳の小川内六左衛門さんに次いで、町内二番目の長寿者。

いつまでも若くお元気で



小川内六左衛門(男) 木津志 101歳	森元シカノ(女) 三拾町 99歳	大迫キク(女) 瀬戸段 98歳	東村シゲ(女) 木津志 97歳	東山有良(男) 鶴田 96歳	高山サト(女) やすらぎの里 95歳	中野チヨヅル(女) 中飯 94歳	酒匂エダ(女) 十日町 94歳	米丸ユイ(女) 建昌 94歳	山下サヘ(女) 堅野 94歳	杉森利徳(男) 上水流 94歳	濱田アイ(女) 西宮島 94歳	小倉ケサ(女) 星ヶ山 94歳	野口チヨチ(女) 山野 94歳	和田スサ(女) 上麓 91歳	伊地知ミ子(女) 東 91歳	奥屋ケサチ(女) 山野 91歳	中豊留スエケサ(女) 豊留 91歳	橋口藤内(男) 堅野 91歳	福崎エイ(女) 東原 91歳	上京田キク(女) 春花 91歳	河内エイ(女) 山花 91歳	池田トメ(女) 高樋 91歳	勝目田鶴(女) 松原下 91歳	小田原スミ(女) 高樋 91歳	湯田キク(女) 山ノ口 91歳	満留センゲサ(女) 原方 91歳	川北フク(女) 原方 91歳	田原哲二(男) 星ヶ山 91歳	松原龍吉(男) 帖佐 91歳	曾山ハツチク(女) やすらぎの里 90歳	山崎クン(女) 星原 90歳	池田イチ(女) 新馬場 90歳	比良ワキ(女) 目木金 90歳	緒方トシエ(女) 飯屋 90歳	岩井田静二(男) 堂山 90歳	堀之内ケサノ(女) やすらぎの里 90歳	大迫チカ(女) やすらぎの里 90歳	谷口ミ子(女) 住吉 90歳	瀬戸山東(男) 山花 90歳	村野信子(女) 東原東 90歳	有村エイ(女) 高樋 90歳	八木アサノ(女) 山野 90歳	前田政彦(男) 山ノ口 90歳	平田伊吉(男) 白金原 90歳	濱田フイノ(女) 青葉台 90歳	上田ハツキ(女) 中飯 90歳	榎田義光(男) 古馬場 90歳	松元エイ(女) 岩崎 90歳	村田卯吉(男) 俵原 90歳	後藤英橋(男) 上麓 90歳	佐藤新藏(男) 上ノ口 90歳	山元シモ(女) 山ノ口 90歳	牧末盛(男) 堅野 90歳	海江田盛重(男) 三拾町 90歳	宮脇盛重(男) 三拾町 90歳	大園フデ(女) 中津野 90歳	小長野カズル(女) 木津志 90歳	春山タメ(女) 仲町 90歳	富田市左衛門(男) 大山東 90歳	唐井チヨ(女) 白金原 90歳	福迫チサ(女) 城下 90歳	堂園イチ(女) 木津志 90歳	永山榮助(男) 船津下 90歳	山下サト(女) 上場 90歳	永岩重和(男) 目木金 90歳	福満榮藏(男) やすらぎの里 90歳	向江ワイ(女) 木津志 90歳	中間嘉之丞(男) 松原下 90歳	野村スエマツ(女) 豊留 90歳	森クン(女) 上場 90歳	佐藤シケ(女) 山野 90歳	森山シゲ(女) 船津上 90歳
---------------------	------------------	-----------------	-----------------	----------------	--------------------	------------------	-----------------	----------------	----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	----------------	----------------	-----------------	-------------------	----------------	----------------	-----------------	----------------	----------------	-----------------	-----------------	-----------------	------------------	----------------	-----------------	----------------	----------------------	----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	----------------------	--------------------	----------------	----------------	-----------------	----------------	-----------------	-----------------	-----------------	------------------	-----------------	-----------------	----------------	----------------	----------------	-----------------	-----------------	---------------	------------------	-----------------	-----------------	-------------------	----------------	-------------------	-----------------	----------------	-----------------	-----------------	----------------	-----------------	--------------------	-----------------	------------------	------------------	---------------	----------------	-----------------

随想が大好評

感応寺隆允さん著 『恍惚の絆』

「感応寺隆允さん著『恍惚の絆』

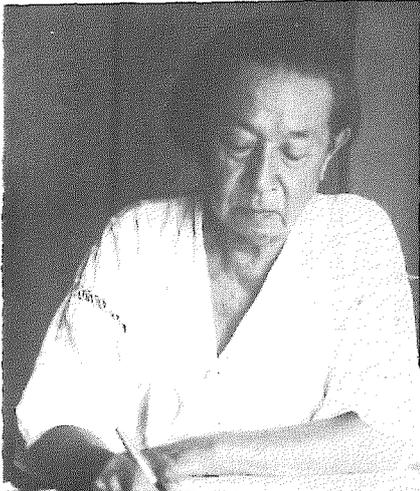
は、世相の暗い今日さわやかな読物として、私は笑いと涙に感動いたしましたので『広報あいら』にお知らせします」といった内容のハガキが、七月下旬、広報係に舞い込んだ。差出人は、始良ニュータウンにお住まいの高城厚子さん。

そこで、九月のある日感応寺さん宅を訪問し、お話をうかがった。

感応寺隆允（かんのうじたかみつ）さん仰は、奥さんの千代さん（つと）と二人暮らし。内之浦町の出身だが、教師生活が長かったため、県内各地を転々とした後、本町で隠居生活に入った。思川のとりに居を構えて、既に十有余年。健康を害しているとき、徒草（つれ

づれ）なるままに書きなぐった文章を定期的に新聞社に寄稿、よく採用されたのが、執筆活動に入るきっかけになったという。

随想『恍惚の絆』は「今昔ものがたり」に続く第二弾。日ごろ感じていたことや、おもしろい体験などを二十六の短編とし、簡明につづてある。歴史や植物の記述の部分では、同氏の多方面にわたる造詣（ぞうけい）の深さや、おう盛な探求心をうかがい知ることができ、今年五月、五百部発行したが、それ以来、激励の手紙がひっきりなし。「輝北町の元町長さんから会食に招待されました。一度はお断りしたんですが『どうしても』ということでお受けしま



「一作目の『今昔ものがたり』は三週間ほどで書き上げました」と話す感応寺さん。彼の創作力と紙とペンが一つになれば、そこにはもう、すばらしい文章が生まれている。

した。ありがたいことです」。さらに、県立図書館からの寄贈要請ラジオでの紹介要請が相次ぎ「何もPRはしていないのに」と、あまりの反響のすごさに本人もびっくり。

夏場の暑さで、執筆は一時ペー

「妻が病弱のため、私自身よくスパーへ買物に出掛けます」という同氏の日常生活のなかで生まれはぐくまれたものであろう。

老いてますます、冴（さ）える。感応寺さん。三作目の出来上がりを楽しみだ。

高額療養費

五万一千円を超えた分

国保が負担



国保へ加入すると、病気やけがでお医者さんにかかったとき、医療費の七割を国保が負担します。例えば、あなたが病院の窓口で三千元を支払ったとすると、医療費全体は一万円かかっていることになり、残りの七割を国保が負担し、あなたが負担するのは、三千元になります。医療費の七割を国保が負担し、残りの三割をあなたが負担するというのが、「高額療養費制度」です。

「申請の方法」
住民課国民健康保険係に備え付けの「高額療養費支給申請書」を提出してください。係では病院・診療所から提出される「診療報酬請求明細書」に基づいて、自己負担額（一部負担金）を計算し、払い戻します。

「いつごろ支給されるか」
病院・診療所から提出される「診療報酬請求明細書」は、国保連合会の審査を経なければならぬため、国保係へ回ってくるのは、診療を受けた月の翌月のなか頃です。したがって、高額療養費の支払いの時期は、それ以降になります。

「申請に必要なもの」
申請の際には、保険証・印鑑・領収書を持参してください。該当者でありながら、未請求の方が見受けられます。高額療養費の請求権は、診療月の翌月の一日から二年経過すると、時効により消滅しますので、心当たりのある方は、早目に手続きを済ませてください。

表1 医療費の負担割合（一般）

医療費が1万円のとき	
自己負担（3割） 3千円	国保負担（7割） 7千円

表2 医療費の負担割合（高額）

医療費が50万円のとき	
自己負担（3割） (15万円)	国保負担（7割） 35万円
高額療養費制度による国保負担 9万9千円	自己負担額 5万1千円

ます（表2）

スポット

ビタミンA



ビタミンは、体の活動を調整する栄養素です。働きによりA・B・C・D・E・Kなどがあります。このうちのビタミンAは、主に次のような働きをします。①皮膚や粘膜を保護して細菌感染を防ぐ②視力を保って目が見えるようにする。

そのほか、乳幼児の成長を促進したり、カルシウムとともに骨や歯をつくる働きをします。

ビタミンAの必要量は、一日でも数ミリグラムと、ごくわずかな量ですが、不足すると皮膚や目などに異常をきたしたり、粘膜の抵抗力が弱まって、風邪や他の病気に感染しやすくなります。ビタミンA不足から起こる病気には、次のようなものがあります。

○夜盲症 薄暗い場所での視力が低下したり、目が暗さに慣れにくくなる

○皮膚乾燥症 皮膚が乾き、細かいブツブツができる

○角膜乾燥症 目の角膜が乾くため、破れて穴があき失明することがある

ビタミンAに富む食品は、ウナギ・レバー・バター・チーズ・卵の

黄身など、動物性の食品です。また、ホウレンソウ・ニンジン・カボチャといった緑黄色野菜に含まれるカロチンは、体の中でビタミンAに変わる物質です。このためカロチンのことをプロ・ビタミンA（ビタミンAの代わりになるもの）ともいいます。

ビタミンには、油に溶けやすいものと、水に溶けやすいものがあります。ビタミンAは、油に溶けやすい「脂溶性」のビタミンです。このため、水で洗っても、冷凍しても、食品中の含有量は変わりません。ただし、長い時間熱したり、乾燥させたりすると破壊されてしまいます。ビタミンAに富む食品を調理するときは注意しましょう。

地震



地震の原因である地下の断層層運動が海底で起きると、海底の隆起や沈降によって海面が急に高まったり低下したりします。このときの水の動きが大きな波となって海岸に押し寄せる。これが津波です。

津波が海面を伝わる速度には、水深が深ければ速く、浅ければ遅いという特徴があります。例えば、水深二千メートルの所では、津波は時速五百メートル進みますが、水深五百メートルになると時速は二百五十メートル落ちます。

一方、地震が震源地から伝わっていく速度は、津波よりはるかに速い時速約一万八千メートル。つまり、地震を感じてから津波が襲

てくるまでにしばらく時間がかかるのは、こうした速度の違いがあるからです。ですから、震源地が海岸に近ければ津波は早くやってきます。逆に、震源地が海岸から離れていれば、津波の到達には、それだけ時間がかかることとなります。地震と津波の関係は、稲妻と雷の関係に例えると分かりやすいでしょう。

なお、津波はマグニチュード約六・五以上の地震になると発生するようになり、約七・〇以上になると被害をもたらすようになります。大きな地震を感じたら、それだけ津波が襲ってくる可能性が高い、ということになります。



NHKの放送世論調査所が、昭和五十七年四月に発表した日本・アメリカ・西ドイツ三国の比較調査があります。それぞれの国の十八歳以上の国民千六百人から二千五百人を選んで面接したものです。

親は子供の犠牲になるべきか

武摩 諒

中心型（または親中心型）としましょう。日本人にはアメリカや西ドイツより子供中心型が多いような気がしました。しかし、実際にはAの子供中心型（Aと、どちらかといえばAとの合計）はアメリカ七八割、西ドイツ六四割、日本六〇割でした。子供中心型が親中心型より多いのは三国で共通でしたが、率が違うのです。

事実を聞く調査に対して、考えや意見を聞く調査は難しいものです。ホンネよりもタテマエが優先することがあります。Bの親中心型の回答が日本では三六割、アメリカは一九割です。学歴が上になるにつれて、これは多くなります。

子供に密着し、子供のためには出費も自分の時間を割くことも平気と思っっている親が我が国には多いように思いますが、意外にさめている親が増えたのかもしれない。子供にかまうより自分が楽しみたいと思う大人が増加しているのかもしれない。親と子の問題に対して考える材料を示してくれる調査です。

調査項目は、政治、社会、家庭・仕事、人間関係、宗教・マスコミ、対日関係など多方面にわたっていますが、この中に親子関係について次のAとB二つの考えを示し、選択を求める質問があります。A「親は子供に最良のことをしてやるべきであって、それによって親が子供の犠牲になってもらわなければならない」

B「親は親、子供は子供である。親は子供のために、自分たちの幸福を犠牲にしないほうがよい」

回答はA・Bの外、どちらかといえはA（またはB）に分類されました。このほかに少数の無回答があります。

仮にAを子供中心型、Bを個人